

あを 7

2014



ガマ池

遠きミャンマー



馬と馬車馱者と眠れり晝の樹下

佐藤喜孝

あそ

七 月



若葉越し

佐藤 喜孝

東京

原發は勝手口出て若葉越し

巢つばめの南溟の夢其をみたし

まん中といひはってゐるチューリップ

天と地と分れがたきに龜鳴けり

夏は來ぬエスカレーターにひかがみ

戦争に口出し手出し貞出さず

はばたくに草木の音檻の鶴

新宿西口の家電量販店前に長距離バスが発着してゐる。バスの旅が好きなので一度あれに乗ってみたいと思つてゐた。今夏機会があり深夜バスといふものを利用した。新幹線との価格差に驚く。同乗者の大半は使い慣れた人らしい。バスに乗ってもたもたしてゐるうちに消灯され携帯の明りでさへバス内が明るくなる。バスの左右後方は分厚いカーテンで外を見ることは出来ない。前方運転席との間もカーテンで仕切られる。むかしの蚊帳の中の暑苦しさを思ひ出した。只寝るだけのバスのやうだ。仕方ないので耳にイヤホンを刺して音楽を聴くことにする。そして時々カーテンの隙間を指で広げ外を窺ふ。小休止のため停車すると前のカーテンが開き控えめに室内灯がつく。アナウンスはない。出発の時間が書かれた札が下がってゐるだけ。用を足し座席に戻る。乗車から下車まで一言も喋らずに済んでしまった。

新幹線も運ばれる道具となり旅の面白さが半減した。よく考へればバスも遮音壁に囲まれた高速道路を走る。新幹線とあまり変わらない。在来線を利用しやうと試みたが全く無駄な抵抗であつた。目的地へ着くまでの楽しさを考慮した移動機関があつても良きさうに思ふのだが……。

山かがし

田中 藤穂

東京

櫨の花散りて石段黄みどりに

悪役は祖父^{じい}が一手に山かがし

五右衛門風呂二人で入る若葉雨

山藤や駅の足湯に役者見ゆ

訃報欄になつかしき人朴の花

咲き増ゆる定家葛の香が闇に

萬華鏡置きて風ある青葉の夜

青葉風

長崎 桂子

三重

休耕の一反蓮華草花盛り

行く春の黒ずみ異息休耕田

出入良き郵便局や燕来る

ゴールデンウィークと言ふ明け静か

青葉風サッカー観戦悲喜交互

青葉風定刻走る若き夢

杖を突き付き添ひと行く青葉風

お友達に頂いた『万太郎の一句』
という本をふと開いたら何と今日五
月六日は万太郎のお命日でした。

梅原龍三郎邸で誤嚥下気管閉塞と
いう事故で急逝する二時間程前に、
とある屋敷の庭に咲き垂れたコデマ
リの花を安住敦氏と見ていたと書いて
ある。私は今、庭でコデマリを見
てきたところなのでぎよつとした。

私が七・八才の頃、万太郎家は近
くで日暮里駅との間に私の家があつ
たので時折お見かけする事があり、
小太り猪首で視線をいつも前に落と
していてちよつと暗い感じの方だつ
たように記憶しているが、もう八十
年近く前の事なのに今日は何故かそ
のお姿がありありと甦ってくる。

小でまりの花に風いで来りけり

万太郎

四月末日の会に「昨日退院しまし
た」とおっしゃって、出席なさった
方がいらつしゃいました。此の会で
は去年の暮から、傘寿を過ぎた方が
家の中で転んで骨折し入院になられ
それが次次に四人も居らつしゃって
其の中のお一人の方でした。

杖をつき「何をするのも不自由で
これからの通院の事を考えると気が
重くて」とおっしゃった。

会の代表の方は帰る折に「どうか
皆さん何かをする時は慌てないで、
転ばない様に充分お気をつけて下さ
いね」のお言葉をお聞きして、我家
へ帰って来ました。

みかんの花

森

理和

東京

深呼吸みかんの花の花盛り

ふる里の空は群青蜷さがす

烏賊釣舟薄紫に水平線

修験者の列に法螺貝山すみれ

小雀の人氣無くなる庭に降る

踏まずには一步の出せぬ桜の実

蝙蝠のフン落ち始む朝の庭

一輪草

山莊慶子

埼玉

ひともとの遅櫻へと馳け寄れり

木漏れ日や苧環二本みついたり

新緑や見知らぬ人のありがたう

庭若葉夫ゐるごとき朝の卓

若葉風後に先にと犬とわれ

記念祭遺影よそほふ白き百合

蒲の穂やこんな所に植えられて



☆

吉弘恭子

東京

瞳瞳をうしろみをかみ花の片

日較差はげしき今日は弥生かな

磴道の朽ちし傍ら春の暮

春暁や丑寅むきて斗柄いま

まなこゐの先で恋猫かまへたる

幼児は莓にさはり手をつなぐ

歩く影おほきくなりて燕のむ

☆

井上石動

山梨

ギオロンのピッチカートは雨蛙

さは言へどやはりや雨の濃紫陽花

魚は樹に登る気色ぞ琵琶湖初夏

虹立つや日照雨に濡るゝ眼鏡橋

あこがれは月下美人のやうなひと

涼しさや常葉樹の守る西念寺

珈琲を炒つてゐますよ青葉雨

先月先々月号で大騒ぎして喜んで
いた私！世の中それ程甘いことはな
い。と（ノーベル平和賞）

隣家から私達が賛成したからつ
て、すぐ戦いが始まるわけだし、
と私達に聞こえるように窓から飛び
込んで来た。

残念ながら頭から重い物を乗せら
れて潰されてしまったような気分にな
った。

俳句が好き、連句も好き、サツ
カー大好き気持を切り替えて日本大
好き平和はもつと好きを貫こうと決
めた。

剣客商売

テレビは録画し、意に適ったものだけ
を観る。先頃、BSフジで、73年の「剣客
商売」を放映。山形勲 加藤剛 音無美
紀子 梶三和子。改めて驚いたことが二
つ。

① 加藤剛の太刀捌・殺陣の素晴らし
さ。とても「付け焼刃」の捌きではない。
毎回瞠目して観ていた。観た舞台は、「コ
ルチャック先生」の一回だけだが、実に
素晴らしい役者だと思う。

② 山形勲という役者の、「目線」と「間」
の素晴らしさ。実にいい役者。こういう
「本物」の役者が、昨今少ない。どのチャ
ンネルも、芸なしの同じ顔ぶればかり。
プロデューサーの質の低下？

思い出せば、小学入学前から、無料パ
スを使い、場末の「二番館3本立て」に
入り浸った。当時、新東宝 第二東映の
全盛。山形勲はやくざの「悪親分」専門。
橋蔵・扇太郎・弥太郎・十四郎・千原し
のぶ・長谷川裕見子・桜町弘子などなど。
宇津井健と久保菜穂子のメロドラマ「君
ひとすじに」は、私のお気に入り。そし
て、万里昌代や三原葉子の官能美に、な
んとはなく「ドキドキ」していた6、7
歳の私でありました。自由にさせてくれ
ていた親に感謝している。

薔薇の刺

大日向幸江

埼玉

豆ご飯一杯だけにとどまらず

モナリザの笑みに漂ふ薔薇の刺

心太少し残せり寂しくも

万緑に鎌倉大仏応へをり

金管のチューバに春の疲れみえ

長屋門来し方思ひ緑なす

そろそろり耳朵ほどのでで虫の

鯉のぼり

木村茂登子

神奈川

鯉のぼり理想の家族構成す

歩くまでの努力忘るな鯉のぼり

画才なし心に写す花菖蒲

十葉の花の可憐を厠に見

青春の日にありしごと苺食ふ

DNA混じりっ気なし菜の花黄

齟齬すこし離れて歩む著莪の花



鯉のぼりは真鯉（父） 緋鯉（母）と数匹の子供の鯉で構成している。

理想的な家族構成である。

かつては父母と複数の子供がいて朝食夕食を共にするのが当たり前前家庭の姿であった。

一日をどう過ごしたか話し合い、子供達は父母や兄弟から得る情報で或る程度の常識や知識も知るのであった。

早く母を亡くした我が家は長姉が母代わりとなり円満な家庭であった。

ニュースで報じられる事件の多くは家庭の崩壊に因があるのではないかと思われもする。

五月晴の空を大らかに泳ぐ鯉のぼりを見ていると、健全な家庭の有り方について考え直す必要があるのではないかと思う。

☆

齊藤 裕子
東京

愛づる人に一枝折らむつつじ花

新緑に浮き立つ白やヒトツバタゴ

見霽かす新緑の海風渡る

目を凝らすお菓子のやうな朴の薬

見つけては数ふ軽鳧の子あさにけに

軽鳧の子に会いたい一心いざ散歩

軽鳧の子等同じ産毛の羽模様

☆

篠田 純子
中央1区

走り梅雨因数分解あらとけた

梅雨激し街の舗道の高低差

あを梅や孫のカノジョは美形らし

中腰になり十薬と話し込む

山王祭 三句

やつつけの巫女の行列山王祭

炎昼の馬歩きつつ水を飲む

熱中症六名といふ立ち話

「今、古川にカルガモの親子がいるよ」。自転車で出かけた夫から、弾んだ声で電話があった。

近所を流れる古川は、街並みに遮られて、橋の上からしか眺める事ができない。主人の指定した亀屋橋に急いで駆けつけたが、その日軽鴨の親子に出会う事は出来なかった。主人は初め狸橋の上で親子を見つけ、電話した後、亀や橋に向って泳ぐ鴨達を追って、川に並行する道に入って走り亀屋橋に來たと言う。残念！次の日から、私達の散歩に軽鴨捜しが加わった。数日後に初めて軽鴨の親子に出会えた私は小躍りして喜んだ。幼い九羽の子鴨が親鳥について川を進んで行く姿や、親鳥の回りで餌を捜して潜る姿は微笑ましく、いつまで見ても飽きない。今一番の私達夫婦の楽しみである。

ざんばら髪の遠藤が見たくて五月場所のチケットを買った。遠藤は鬻を結えたと聞きちよつと残念。相撲を観るのは二回目だが、前回は蔵前国技館で大鵬・北の富士が現役だった。

両国国技館は広くて驚いた。遠藤ブームでカードやグッズに売店は人だかり。弁当・ビール・焼き鳥と祭りのようだ。

十両の土俵入りが在るとは知らず新鮮に見た。横綱は今場所から三人で、さすが白鵬の土俵入りは綺麗で感動した。一番一番力が入り、見ている方もくたびれる。さて遠藤だが日馬富士にあっさり負けてしまったが、声援の大きさと溜息は一番だ。

櫓からの、はね太鼓が心に沁みた。

後頭部に涼風の立つはね太鼓

白ペンキ

定梶じょう

石川

七浦村一の坂てふ鳥ぐもり

艫を押せば水尾がのどけし蹤いてくる

崩れんとしては春濤立ちなほり

メーデーが見てゆき銃砲店過ぎる

あゝさうか今日は憲法記念の日

高きこと給水塔の立夏かな

白ペンキ止マレと画かる街薄暑

☆

須賀敏子

埼玉

山羊のゐる駅で花見の終はりけり

四十年住めば故山や新茶汲む

朝掘りの筍選ぶ道の駅

こどもの日三角点で握り飯

永き日や少し苦めにママレード

県民の森に県花の躑躅咲き

外税にまだまだ慣れず五月尽

先日、地元集会所の広場に一基の句碑が建てられた。ホトトギス同人の方のものだ。全国的な大会で特別賞を授与された句、という。へ大鮑差し上ぐ手より浮かみくる」当然のことながら「差し上ぐる手より」とすべきものだろう。しかしそのことをいう人は誰もいないし、第一、一流の先生方の選を経ているわけだ。これが仮に活字になっただけの句なら、良くある遣い方、と見逃されたであろうが、句碑となればまた別だ。作者の死後も長く残るものだから。

もつとも、作者ご本人が気付いていないように、句碑の読み手も気付かないであろう、とは言える。目に角立てることも止めよう、と思いつら、句碑となればまた別なのだ。



直情や白梅うぶごゑ三八銃	佐藤喜孝
目も鼻もかくれむばかり田水張る	竹内弘子
囀りやお客の少女縁側に	田中藤穂
楽の音と人声とだえ花の闇	長崎桂子
小さき巢の壊され下がる若葉雨	森理和
考よりも少しつよいぞ温酒	吉弘恭子
ふらここや肉じゃが好きの一才児	赤座典子
呼子鳥厚き大氣の流れ来ぬ	井上石動

通し鴨陽は中天にかかりけり	大日向幸江
ドレッシングに甲と乙あり春野菜	木村茂登子
さつと茹で露は剥かれてあさみどり	斉藤裕子
蛩声は大使館前春闌る	篠田純子
落花いま壺中の天にあるごとし	定梶じょう
目薬をさしていつもの桜かな	須賀敏子
よく見れば頑は無き苗日の盛り	篠田純子
鐘撞きて春愁といふトンネル抜けた	々

喜孝 抄



六月作品より

木村茂登子・篠田純子・佐藤喜孝

直情や白梅うぶぐゑ三八銃

佐藤 喜孝

白梅、うぶぐゑ、三八銃どれも「直情」と作
用し合っていて、色々に想像できる稀有な句だ
と思いました。待焦がれた春、真っ先に白梅の
放つ眩しい直情。肺呼吸の始まりの、切羽つまつ
た産声の、この世で初めての直情。三八銃の引
き金をひくときの、「打たなければ殺られる」の、
真空状態の直情。鑑賞する度に想像力を刺激さ
れます。(純子)

シャキシャキと春の水切る花鋏

佐藤 喜孝

春の水は清冽である。この句は花を活ける前
水揚げの為根本を切る折の感じを水を切るとし
た表現が鋭い。以前恩師をはじめ数人の華道家

が明治神宮で献花された際参列させていただ
いたが、神苑に厳かに冴えわたる鋏の音の全身に
響いた記憶が蘇ってきた。(茂登子)

バラボラの神あぶぐむき若緑

佐藤 喜孝

新緑の頃の明るいさわやかな風景が伝わって
くる。ガガーリンは言った「地球は青かった」と。
一方あまり伝わっていないが「神はいなかった」
とも言ったという。日本人の口からは出ないユー
モアであろう。

神天にましまし、と思っている方が幸せで夢
があると思う。(茂登子)

カステラの木函のしめり彼岸過

竹内 弘子

彼岸過ぎのまだ春浅い頃の季節感が巧みに表

現されている。この頃、お寺の境内の隅の小屋
にまだすっかり乾ききつてない閑伽桶が積まれ
ているのを見た。暑さ寒さも彼岸まで、と言うが、
もののしめり気がどこに残る頃である。

しっとりとしたカステラは小さく個包されて
ないだけにその函に香りとしめり気を伝えてい
るのである。(茂登子)

目も鼻もかくれむばかり田水張る

竹内 弘子

溢れんばかりに満々と田に水が導かれる。こ
の状態を「目も鼻もかくれむばかり」とは言い
得て妙。擬人化は難しいものときくが、この句
は田水の様と、プールなどで水に接したときの
作者の体で感じた感覚が合体して臨場感ある一
句になってゐる。(喜孝)

清明や土に降りくる雀たち

田中 藤穂

囀りやお客の少女縁側に

田中 藤穂

作者のお宅に可愛いお客さんがやって来まし
た。縁側に座り作者と話をしたり、笑ったり。
はにかんでいる様子も見えてきます。高い調子
の話し声が聞こえてくるようです。楽しそうで
すね。(純子)

ふらふらこや肉じゃが好きの一才児 赤座典子

四歳になる女の子にサクランボを差出したら食べないといふ。種を取り無理に頼んで食べさせてみたが皮が嫌だとべっぺしてゐた。掲句は一歳児で肉じゃがが好きだといふから面白い。教へるでもないのに子供に好き嫌いがあるのが不思議だ。写真とひと味違ふ孫の記念になる句だ。(喜孝)

ドレッシングに甲と乙あり春野菜 木村茂登子

ドレッシングに甲乙が在るといふユニークな句です。作者はサラダがお好きなのでしょう。二三種類のドレッシングが常備されているのでしょうか。あれこれ試しても、どの味でも美味しい春野菜のパワーに、感動している作者のようです。(純子)

私も野菜サラダを食べるときは食べる、が掛けるものにより食が進まぬ時もある。「甲乙」といへば比べてゐるのだが、「甲と乙」といふとどれにしようかと迷つてゐる感じ。

茂登子さんのお手紙で「俳句が出来なくなりました」とあった。俳句を作らないと決めたらほつとしたとも書かれてゐた。出来ない理由は個々に違ふだらうが、私も同じやうに俳句を捨ててしまへばという思ひをした時があった。その時出会った句集『機』が手をさしのべてくれた。

跳ねてみて水面丈夫水馬 和田魚里

あやめとはあの字とやの字めの字かな

単細胞の私はこれらの句を読んで肩の力が抜けた。それからは「泳げなくともへいきのへいざ田螺かな」「天空海瀾摘みあましをく芹嫁菜」

陽で通し鴨を通して閑かな時間のうかぶ句である。(喜孝)

蜚声に大使館前春闌る 篠田純子

およそ大使館とは、閑静な高級地の広い土地を占め普段はピタリと門扉を閉じ中の人の気配も感じられない。というのが私の印象である。大勢の人がその前につめかけて蜚声をあげているとは異様な風景である。世界の各国間には輾轢が絶えない。両者どこの国かはわからないが、こうした風景を見ることがなく平和な世界がつづいてくれれば良いと思う。(茂登子)

よく見れば頑是無き苗日の盛り 篠田純子

足下を注意してみると芽が出たばかりの苗ではないか。何の苗にしても日の盛りの日晒しは苦手であらう。「頑是無き」と苗を慈しむ作者で

呼子鳥厚き大氣の流れ来ぬ 井上石動

解放していった。(喜孝)

「ふらふらこどり」とは不思議な季語を詠まれた。実態が定かでないが詩的魅力がある。「厚き大氣の流れ来ぬ」で些末な事にこだはず晩春の重層な時の流れをを表現してゐる。川柳では何の鳥だか詮索をあきらめ「秀吉ならば「猿ならば猿にして置け呼子鳥」と読み捨ててゐる。(喜孝)

通し鴨陽は中天にかかりけり 大日向幸江

前句の「呼子鳥」と違ひ「通し鴨」ははっきりしてゐる。『俳諧歳時記栞草』には「日光山中禅寺の湖に真鴨すむ、甚小し。黒鳧二種有、淡黒也。常に居て、北へ帰らず。」とある。中天の

ある。

鐘撞きて春愁といふトンネル抜けた 篠田純子

寺院の鐘であらう。あの大鐘を撞く機会が旅の途次であつたのであらう。思ひ切り撞木を引き、放せば流石の春愁もどこへやら退散した。口語がそのさっぱり感にふさはしい。

佳きものを見、口にした興奮が伝はる特作である。



わが敬愛する俳人たち

―百日紅乙女の一身またたく間に 草田男―

阿部寒林



中川宋淵

宋淵老師（以下老師）と初めてお会いしたのは兄英雄（万緑同人）が伊豆龍沢寺に於いて佛前結婚式を行い当時の住職であつた老師が導師となられて執り行われた日であつた。

兄は前住職山本玄峰老師の頃から参禅修行をしてきた関係上龍沢寺とは縁深い関係にあつたからで特に老師とは在家の立場とは云え師弟の間柄とも云える縁であつた。披露宴は極く内輪の縁者二十名位のみであつて三島の桜家（老舗のうなぎ屋）の別宅が箱根の裾に在る「静川」という高級料亭で行つた。贅を尽くした数寄屋風の総松造りで広い茶畑を所有していた。終宴に近い頃、老師は立ち上つて一人一人に一、二字の禅語を揮毫された色紙を下された。その時、「寒林さん俳句で頑張っているネ」と声を掛けながら「あんたにはこれがいいネ」言われながら「如意」と二

吟行案内

見沼代親水公園・舎人氷川神社

集合場所 舎人ライナー終点「見沼代親水公園」駅ホーム

集合日時 7月26日（土）11時



字の書かれた色紙を下された。老師はこの言葉の通り何でも意のままに——、そして広い俳句を創りなさい。」と言われたのをよく覚えていた。昭和四十年代の頃であり恐らく老師は俳句上の師である飯田蛇笏の亡き後、「雲母」を去っていたから、ここで私と会いつい俳句の事を思いついたのかも知れない。

老師の俳句に就いては昭和五十二年の『暖流』へ五回に亘り執筆したので省略させて頂くが、拙文の散逸防止のため「宋淵俳句とその周辺」と題して一冊にまとめたが折を見て再校正をして造らうと思っているが未だに実現しない。生意気なことを書いてあるので老師へも贈ったが一年余もご返事が来なかった。これは山内で転んで頭を打った隠察に籠っておられたとのこと。葉書にはいま記憶にないが月並の礼文でないことは確かであった。

三島沢地の龍沢寺は彼の白隠禪師を開祖とし、戦時中は山本玄峰老師が住職であった。

私の出征直前に（昭和十八年九月）玄峰老師が日章旗に経文の一節を揮毫して下さった。この時の龍沢寺行は沼津の小学校時代の遠足以来であった。（日支事変中）当時の教育は軍国主義の下、何でも質実剛健が唱えられ忠孝一本槍の教育であった。然し神社は兎角、寺院、特に禅寺などには戦時色など殆んど感じられなかった。

老師が龍沢寺の玄峰老師に自ら鉄槌を求め乞いて入山を許された頃も同じ時代の筈である。それまで折角東大卒業の秀才が学者にも又官僚の道を求めず得度して甲州塩山の向嶽寺にて修行、亦大菩薩峠に籠り木食修行に専念されていたのである。ここで中山介山先生を知り交遊を深めたことは後年老師の說話などで知った。小説「大菩薩峠」は多分に老師の影響をうけてか仏教思想が色濃く表現されていることは小説・映画を知る人は誰でもが感ずるところである。

同じ県内に住まわれる『雲母』主宰飯田蛇

笏師の門を叩いたのは昭和六年初秋（九月）の頃だと蛇笏師は記されている。老師が血氣盛りの身を大菩薩峠で木食修行をされていた頃である。蛇笏師の説によるとその時の様子を次のように述べられている。

「客は訪問された際「どちらからお見えになりましたか」と訊くと「私は山の方から参りました」と答えた。…」

甲府の図書館へ行ったら、兄が境川の郷里に住んでいるということを知ったから尋ねてきたということである。この時老師が蛇笏師の要求に応じて近詠を見せた二句。

秋晴や火口をおつる砂の音 樹海はれてはやわたりくる小禽かな

閉山後の富士山頂に三昼夜起居した時の作と聞いて蛇笏師はただならぬ青年詩僧と感じたそうである。当時の『雲母』十月号に掲載されている。

其の後『雲母』主要同人となった俳壇での老師のご活躍ぶりは当時の俳人の知るところである。然し師の玄峰老師は「龍沢寺をして俳諧寺にする勿れ」と兼てより戒められていたので俳人などの出入は勿論、愛好者たちの吟行会など一切山内では無かった。唯例外として『雲母』同人の朝風・蒼風の二氏は個人的に会われていた。私は間接的には覚えきれない程交際があったが、老師と個人的に会うことなど皆無であった。

例えば毎月二十八日に谷中の金正庵へ三島から赴き提唱されていたが、これは師の玄峰老師の意を継いでのことであり、代々の龍沢寺住職が受継いでいた。亦私の会社での新入社員研修会は龍沢寺と決め、三泊四日を雲水同様の生活を体験させた。これは現在でもつづいている筈である。なお同寺での年中行事などには出向かねばならなかったので老師とは事務的に会いしたものである。以上のようなわけで次に個人的にお会い出来たのは確

か昭和五十年後半頃だったかも知れない。

京都岩清水に妙心寺派の禅寺で確か円福寺という寺が存在する。この寺から会社へ何かの行事の招待の通知があった。代表で参列することにした。この寺は一名達磨寺とも謂れ当時国宝の極彩色の達磨大師像の軸を所蔵されていることで有名であった。後日知ったのであるが、この寺に数年の間玄峰老師がおられたことを知った。後に龍沢寺へ晋山されたが後年乞われて大本山妙心寺の管長に推されたことは当時誰も想像する者はなかった筈である。このような関係もあつてか、いまでも龍沢寺と円福寺とは深い関係になっているわけである。初めて訪れた当時の住職は西片擔雪老師で長い薄暗い廊下を雲水の案内で何回も曲がって住職の居られる部屋に案内された。廊下の曲がり角々には必ず雲水が正座しておられた。住職は二三人の地元の信者の方が居られるのを無視して丁寧小僧同様の私を迎えて呉れた。私のところの会社と龍沢寺

との関係をよく知っておられたので緊張気味の私の気持を忽ち解してくれた。

雲水達には厳しくも在家の人には実に優しく接するのは特に禅宗の老師さんたちであることは体験をしていたが、擔雪老師の場合あと一、二時間で本堂で行われる行事の導師となるお立場であるので、その場面を本堂で参観して居て全く別人と思える程その威厳ある御姿に驚き感動したことはいまでも忘れられない。擔雪老師も後年妙心寺管長になられた。

擔雪老師の部屋を辞し中庭のある廊下に出た時、二三人の子供たちに付き纏われてよろししながら一人の正装した老僧が向うから近づいてきた。私は軽く会釈して通り過ぎようとした時、「寒林さん、よく来たネ」と向うから声をかけられた。よく見ると宋淵老師が微笑みながら近づき子供達の頭を撫でながら「若し暇があつたら龍安寺の石でも観に行きなさい、私の弟子があそこ住職だから電話をしてやつてもいいヨ」と言つてすすめら

れたが石庭は二度程観ているので今日は暇がなく日帰りなので―とご返事をた覚えがある。この僅か数分の廊下での立話が個人的談話の二回目、兄の仏前結婚以来二十年近くなと思う。正装の老師のお姿を撮った写真が今でもどこかに保存されている筈だ。「老師さん又三島か全生庵でお会いします―」とお返事してその場を離れ、老師は又子供たちと一緒に本堂へ向われた。

いま深く考えてみればこの時、擔雪老師にせよ宋淵老師にせよ結果的には今生の別れとなつたわけである。先のことは分らないものである。

その何年か後、老師は住職を鈴木宗忠老師に譲り隠栖の生活に入った。谷中への提唱は宗忠老師のお役目となつたが、たまたま宗忠老師とお会い出来た時のお話の中に宋淵老師の健康を危惧されているようなことがあつたのでよくお訊きしてみると、早朝の寒さの中でも元気で素裸となり山内を歩き廻るが、昼

間の偶に暖かい日には沼地の方まで行くことがある。この奇行には困つたものでよくご注意しても「お天とうさまの光りが勿体ないから―」と言つては好天気の日には相変らず裸で歩き廻るそうである。この危惧は昭和五十年の早春に起つた。温暖な三島とは云え梅の香がやつと流れ初めの頃、早朝裸の散策を終え待僧がいつもの通り風呂への手を貸しているときに急性心不全に襲われて遷化されたのである。危険といえば危険この上ない奇行かも知れぬが宗忠老師ですら諫言を遠慮がちに言わねばならないのであるから他の誰もその健康上の諫言を老師には云えなかつたに違いないと思つた。いま考えてみれば自殺行為としてか受取れない行動であつた。老師は妙心寺管長就任が時間の問題であつたのだ。

葬送の日、本堂の真中に棺が置かれそれを取巻きぐるぐる廻りながら数十名の僧たちが延命十句観音経を唱えつつ次々に参列の在家の私達にも加えさせてくれた。二千名を越す

弔問者、出棺時には畦道に寄って遠く老師の棺を見送った。早春の空に浮ぶ白雲の動きを誘うかのように折から弔鐘が鳴り響きその余韻が老師の声のように私の耳に届いた。

梅の実の子と露の子と生れ合ふ

昭和五十二年の『暖流』——宋淵俳句とその周辺——の中では悟ったようなことを述べているがいま読むと恥しい次第である。この齢になつてよく読み返すと、老師の死生観が手にとるように理解される句である、

花の世の花のやうなる人ばかり

この句は弟子の元塩山の向嶽寺管長老師の句碑と並んで甲斐大和村の天目山栖雲寺に建っているが建立以前は木枯さんと訪れたりしたがいちどは接したいものと思っている。



師山本玄峰老死御遷化の追悼句
啼きめぐる夏の鳥ありその夜より



中川宋淵書

自詠自読

とうさんのそのまたとうさんの豆の飯 純子

父方の祖父は豆が好きだった。新潟の清水の湧く川の傍に住んでいた。小学生の頃、私が祖父の家にいった時は、川で冷やしたサイダーと「純子が東京から来たから醤油おこわでもつくるか」と大きな豆の入った醤油おこわをお腹いっぱい食べるのが、楽しみだった。蒸かしたもち米にしとをうつのだが、そのタイミングとしとの調味料の配合が絶妙で失敗ということはなかった。夜は、裏の田んぼで蛙が鳴き怖かった。その後は、静か過ぎて寝付けなかった。大きな味噌樽も有った。

私達の結婚式に祖父母は東京に来て祝ってくれたが、主人といちげんに新潟に祖父母を訪ねたとき、

やさしいお顔の眼が、私の方へ動いたような気がしたのだ。そんな事はある筈はない。でもあの伎芸天像は何か他の仏様とは違う。見れば見る程私達と同じ温かい血が体内を流れていて、心臓も胃も腸も持っでいらつしやるような気がする。今にも何か語り出しそうな、お声がきこえてきそうな……。他の幾つもの仏像も拝んで私は秋篠寺をあとにしたのだが、あの一番始めにてんによを見上げて天女と瞳が合った一瞬のときめきが、今も鮮やかに心に残っていて忘れられないのです。

浜長に草履も靴も祭かな

東亜未

築地の方への吟行の折、二階建くらいの下町の玄関に、靴や草履が沢山脱いでありました。次々に半纏の人々が、靴や草履を脱いで揃える風でもなく二階に上がっていく。二階の障子は半分開いて活気が外まで溢れていた。何よりも草履や靴が目にとびこ

私達になかなか子どもが出来ないのを、頻りと気にしていた。

風邪などひき体が弱った時、精神的に疲れた時不意に祖父の醤油おこわが食べたくなる。祖母の里芋と大根の煮付けも恋しい。

夏に入る伎芸天女の流し目も

藤穂

秋篠寺は静かなよいお寺だった。私が訪れた時はお寺の女の方が鍵を提げて案内してくださり本堂の扉を開けて下さった。

堂内は薄暗くてすぐには眼が馴れなかったが、伎芸天は入つてすぐの右手に立っでいらつしやうた。思つたより大きく特にお腹から腰の辺りの豊満さに圧倒された。仏像というよりひどく人間的で、確かギリシャ彫刻などと通じるものがあるように思われた。

正面に立つまえに私は手前斜めから見上げたので、天女の少し下向きの、微笑していらつしやるような

んできて、あゝこれから祭がはじまる！靴や草履が着替えてくる人を待ちかねていると感じました。

庭の木木十一月の月影に

桂子

若い時から長い間、寝る前に部屋の窓の雨戸を閉める時、空を見上げ月が輝いていれば何となく心嬉しい気持ちになり暫くぼんやり眺めている癖がありました。今も煌々とした光で明るい夜は好ましく思います。

この句は平成二十四年で、九月も十月も満月の夜は曇りか雨だったのか十五夜のお月様を見る事は出来なかった。後の月もその翌日の月も蒸し暑い日で駄目だったような記憶が残って居ります。

今の住所に昭和五十四年から住み、その時から庭の世話をして下さっていた方が亡くなられて、何方かにお願ひしなくてはと思いながら年月が過ぎて庭木は伸び放題見事に成長してしまつた。

その日は何故か午後の三時過ぎから友人や知人の

出入りが重なり、階下の座敷の雨戸を閉める時間がかなり遅くなった。気が付けば満月でも無いのに月は冴え渡り明るく昼のようで、ひんやりとした気持ちの良い空気に、庭にある三本の杉の木を見上げていたら、枝を透かして見える月に薄い雲がゆつくりと流れて行く数分間の現象。

ぼうぼうと伸びた木も月光に照らされ影は小さく、敷石は美しく見えて私の眼には限り無く趣を感じるひとときでした。

人の屋根綿雪積みて富むごとし

じょう

先輩であり、私の最初の師といつていいとほろさんは、吾れ、吾が、などの自称のことばをほとんど遣わないかたでした。その影響下にあった私も、なる可く遣わないようにしていました。が、やつぱり使ってしまう。

掲句も、へわが屋根の綿雪積んで富むごとしへが

毎日、米を研ぐ時に出る白濁とした研水は栄養豊かな植物食だ、寒風の中肩を寄せ合い頑張る姿は、私に倅せをもたらしてくれる不思議な花だ。

そんな寒菊に私からの倅せのお返しのみ研水。

ひとひらが竹林深く風花す

じょう

古い句帳を読み返してみると、この句、平成十八年に作ったものらしい。らしい、と言いましたが、記憶になかったのです。

ついでに句帳を遡ってみると、私は平成十六年から『あを』誌に投句を始めています。どこで『あを』のことを知ったのか。実はこれも記憶があいまいで、ただ、主宰者は無季の句も発表なさる方らしい、と理解した、そのことだけが当誌に参加するきっかけになったのです。

むかし、上京して参加した句会は、無季の句もごく普通に投句される集りでしたから、もともと無季

もとの形。ただし、自らは遣わなくとも遣った句を認めないということのないがとほろさんでしたから、さてどちらの形を可とするだろう、というようなことは、今でもつい思ってしまう。

そして、どちらでもいい、自分のいいと思う方がいいんだ、と言うだろう。と思うに至って、自分で決めるべきこと、と気がつく。

そしてまた、何十年も俳句をやってきてこの程度、といえるのはむしろ、伸びしろがあるということ、などと思う。秋元不死男の句にもあります。

七夕やまだ指折って句をつくる

不死男

寒菊の根元にこぼす米研水

幸江

冬に近い季節は咲きほこっていた花々も哀れな姿になりはてている。そんな中寒菊の蕾がゆつくりとゆるび始める。

俳句を読むことに抵抗を持たず、帰郷してそんな句会の近辺に存在しないことの方に寧ろ焦慮を感じる。ことさえあったのです。

しかしながら、意識して無季俳句を作ろうとして成功した試しのないこともまた知っていました。不遜な言いようになるかもしれませんが、正直『あを』誌への投句がここまで続くとは自身思っていなかったのですが、いつ頃の号でしたらう、ある無季句に対して「無季にする理由が見当たらない」と評したのは喜孝さんでした。そういうことなのです。無季俳句には無季にする理由がある。中心に据うべき辞が季語を越えた時にそうしていい。無意味に季のことばをとり去るのはやはりまずいと思う、何しろ季語は強力ですから。

そういうわけで、俳句作りへのとりかかり方は喜孝さんと私では隔たりがあると思うのですが、ことばへの向かい方はほぼ同じ、と感じているのです。十年投句が続いた理由はそんな処にあるのでは、

と。

蠢きてあうらから春立ちのぼる

恭子

幼き頃はわたしにもあった。雪の新潟で四歳から十五の秋まで十年余のことである。今にして思えば疎開転居といい思い出になっているようだ。なかなか好んで雪国生活はできない。一番ひっくりしたのは、東京に十月に越してきた。いい天気だった。ところが十一月の後半になっても空が青い。えっ！寒くなっても青空なんだ、と。冬になるとどんよりとした鉛色の空ばかり。冬の間じゅうのことである。何の考えもなく生きていたのだろう。東京に帰ってきた第一声が冬の空に青空があるんだ。と言ってしまった。雪国にいたからなのか分らないが、少し暖かくなると靴下が無性に駄目になる。三月ごろから靴下なしの日常である。私を見た人は顔をしかめる人がいる。仕方が無い。寝ている時も足の先は布団の外。そ

んな事からなのか句ができた。むずむずと土踏まずがしてくる。まだコートなど着ないとおかしい季節なのだが、足先だけは別物。足の先からだんだんと全身に少しづつ春のおとづれが感じられる。としのせいか秋はそんなに遅くまで素足ではないと思う。あまり気にしてなかったのといつ頃靴下をはくのかな



あをキーワード俳句辞典(くーくう)

句

咲きにけり桜草の句を作りたいし	須賀 敏子
句の話して長電話秋月夜	田中 藤穂
別れ霜糸つさんの句にどつぷりと	赤座 典子
枯野の句書くにたばさむ旅靴	佐藤 喜孝
芭蕉の句ひるがへしひるがへし鳴る風鈴	木村茂登子
主観強く句をひねりをりピラカンサ	篠田 純子
恋の句が出来ぬと蝌蚪の水の辺に	田中 藤穂
白うちはかな文字で書く千代女の句	藤野 寿子
天高し健やかに老い句に遊ぶ	鎌倉喜久恵
年鑑は句のしかばねや秋ともし	堀内 一郎
げじげじの句はえ作らじ嫌ひな虫	定梶 じょう
句に遊び一喜一憂年忘れ	大日向幸江
露茹でて皮はぎながら句を捻る	斉藤 裕子
苦	
苦も楽も穀象虫は知つてゐる	篠田 純子
四十年苦と共にきて五月晴	芝宮須磨子

区

子かまきり東京港区さ迷える	東 亜 未
千代田区の梅に鶯見つけたり	須賀 敏子
節分草保護区の外れ坐禅草	森 理和
本郷区荻岐坂上の熱中症	篠田 純子
杉並区大字竹林字棕鳥	佐藤 喜孝
静岡市葵区からの新茶かな	木村茂登子
内モンゴル自治区より来し大相撲	竹内 弘子
杭	
夕風や鶉の一行にくされ杭	関口 ゆき
翡翠の来るべき杙の日永かな	木村茂登子
冬に入る動かぬものに川の杭	定梶 じょう
杭を出て杭に戻りし冬の影	佐藤 喜孝
空中	
久々の空中浮遊金木屋	篠田 純子
夏木立オランウータン空中散歩	須賀 敏子
箱根路の空中散歩秋の富士	森山のりこ
空中にいろんな物質春の雨	篠田 純子
空中に浮きあがりたる桃の苑	山 莊 慶子

絶巔の石

阿部寒林

剃刀となりて燕宙を剃る

蝌蚪脚を出せば「のらくろ」進級し

椿落ち火焰地獄の道つくる

絶巔の石青春の証なる

雪形を見せ付けてゐる岳恋し

わが触るる駒草岩稜までつづく

——祭あはれ

雲版より流れるジントタ誓子の句

咲き乱る花に無縁の女王蜂

鏝育つ大槍小槍朝焼に

海山に縁なき身なり葡萄吸ふ

あを招待席



1 今朝の秋挿木の薔薇に荅かな 芝 ゑつ
 2 水澄める日のやはらかき風 篠田不寝
 3 月さやか振り向けばまだ手を振りて斧田くら
 4 赤ちやうちにすはる固椅子 井上石動
 5 易断がわれを目招きさてもさても 定梶じょう
 6 のぼり旗揺れ街は裸木 森 草
 7 初鶏に太郎の塔と次郎の塔 佐藤竹洗
 8 ゆとり無き身に夢次々と 赤座 椿
 9 帯緩く仕立て直しの伊予緋 須賀ととろ
 10 駒下駄で急ぐ橋の袂に 吉弘音々
 11 添へぬならいつそのことと縋りつき 不寝
 12 毬弄ぶ門の唐獅子 くら
 13 寒鴉ぱつと出てさて鐘も鳴り 石動
 14 雪嶺に出づ千鈞の月 じょう
 15 芝居ならここで暗転息を抜く 草
 16 遠くの人に手話もどきして 竹洗
 17 花見舟にぎやかに待つ隅田河岸 椿
 18 渋滞のバス鳥雲に入る ととろ

19 風光り猫の肉球くろくなる 音々
 20 本家新宅間に高塀 じょう
 21 累代の女系に婿の適不適 くら
 22 ポケットの手に金太郎飴 音々
 23 夏休紐育へとシヨウウを見に 不寝
 24 炎暑の場末躁も鬱もと 石動
 25 断ち切れぬ思ひ日増しにたかまれり 草
 26 笹の小舟にとも綱の無く 竹洗
 27 墨を磨り静かに時の移りゆく ととろ
 28 越前和紙に伝説のあり 椿
 29 竹やぶへしじに月光節照らひ じょう
 30 座敷真中を歩くこほろぎ くら
 31 径々の紅葉且つ散る馬返し 音々
 32 初瀬の店で旧知に会ふ 不寝
 33 顧みば戦の世々は長かりき 石動
 34 ノーベル賞に九条名告り 草
 35 花をもて包みこみたる小学校 竹洗
 36 雲のあなたに春惜しみつつ ととろ

①秋に巻きはじめ春に満尾した息の長い歌仙。「ゑつ」は芝尚子さんの連句の号。昨年秋発句をお願いした。作句が無理だと休まれてゐたのを無理に頼んだ。これで最後よ！と云いながらの発句、見事な「あを」への挨拶になってゐると感心した。六月二四日親しい人に囲まれ身まかられた。
 ②発句をやらかくあたたかく受止めた。
 ③見送られる人の句。テレビ番組の「田舎へ泊ろう」の別れの場面が浮ぶ。
 ④これは見送った人の行動。まだ呑みたりなかったか、または別れのつらさを紛らすためか。
 ⑤酔ひて外に出れば易断と目が合ってしまった。「さてもさても」だ。
 ⑥風も吹いてきた。
 ⑦初折の裏に入る。気分転換、大景にしてみた。連句で新年の季語にとまどふ。晩冬として扱ってみた。
 ⑧経済的ゆとりか精神的なゆとりか。
 ⑨夢の一つか叶ったやう。
 ⑩「君の名は」「はりまや橋」「マディソン郡の橋」など橋は恋の場に使はれるやうだ。

⑪現代的とも思へるストレートな恋句。
 ⑫カメラは静かに辺りの景にパンする。
 ⑬須磨子さんの身内に真打がをられる。私のPop touchにその扇辰さんの「野ざらし」が入れてある。
 ⑭寒村の景と見た。
 ⑮「芝居なら」と緊張の場をさりげなく躲した。
 ⑯声を出せぬか、届かぬのか。手振で何かを伝へやうとしてゐる。即席手話である。
 ⑰花見のうかれやうが前句と共に浮ぶ。
 ⑱川の上も道路も人出で渋滞。
 ⑲猫も浮れ歩きの季節。
 ⑳人の世は猫のやうに行かぬらしい。猫は高塀の上を猫道にしてゐる。
 ㉑これも人の世の難しさを描いてゐる。
 ㉒猫も無邪気であるが、子供も猫に劣らぬ。
 ㉓あの長い金太郎飴は空港を無事通過して飛行機に乗れたやうだ。
 ㉔大都会には表と裏がある。
 ㉕恋は思案のほか
 ㉖恋句になるか不安だが気に入ってゐる。
 ㉗むかしの恋を回想してゐる風情。

- ②⑧ 川上御前といふ女神と知る。
- ②⑨ じょうさん、月の座二度のおつとめご苦労様。竹藪は魅力的な空間。
- ③⑩ 鳴かぬ蛙から名句が。鳴かぬこの蟋蟀は。月の光の射す広々とした畳座敷。
- ③⑪ 前句を山中の名家か寺と見たか。そこへの道筋。
- ③② おもはぬ出会ひも旅の楽しみ。
- ③③ 戦友にでも会ったのであらうか。
- ③④ 憲法九条があはたほしい。ノーベル賞受賞とか、阿部総理の拡大解釈とか。挟まれた九条はどうしたらよいのやら。
- ③⑤ いつまでもこのやうにあつて欲しい。
- ③⑥ 発句のゑつさんの急逝に言葉なし。ただただ惜しむのみ。急遽一部を一直した。(佐藤喜孝記)

あとがき

尚子さんには『あを』の節目節目にお世話になってゐる。獐をやめ暫くして『あを』をはじめた。その折、励ましの二句いただいてゐる。仕事場の目につくところに貼つてあつたのだが、今見たらない。きっと大切にしまい込んだのだろうが、その仕舞先を失念してしまった。創刊十年の時は声を大にして祝賀会をやりなさいと云はれた。私は柄じゃないからと躊躇つたがご意見番の剣幕に圧倒された。振返つてみればあの日はいろいろな意味で私の宝物になってゐる。(喜孝)

二〇一四年七月号

発行日 七月六日
発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090・9828・4244
ファックス 03・3371・4623

印刷・製本・レイアウト

カット／恩田秋夫・松村美智子 竹僊房
表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
郵便振替 00130・655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。